

# 茶の湯文化学会会報 No.64

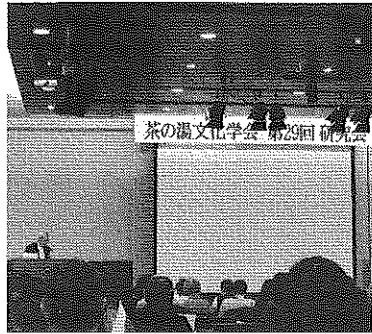
第64号/2010年3月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 第二十九回研究会報告

飯島照仁

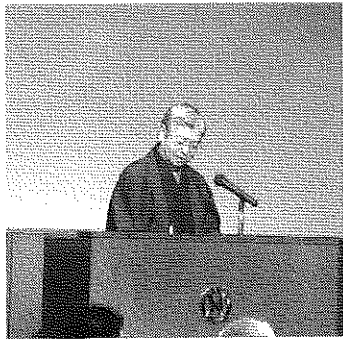
茶の湯文化学会の第二十九回研究会は、一月三十日・三十一日の二日間、広島市で開催された。三十日は広島市内のオリエンタルホテル広島にて午後より講演会、三十一日は同市内の上田流和風堂で見学会が行われた。広島での初めての研究会であったが、両日ともに参加者が多く大変盛況であった。

記」と『宗湛日記』の記述をとり上げて、古田織部と上田宗箇の茶道具の特徴を分かりやすく解説した。更に上田宗箇著『雲脚抄』では、床の間に籠の花入を直に置く時は、前より二十一目に」という記述に注目され、花入の成り立ちや、上田家蔵の耳付き花入についても言及した。また最後の『宗箇様御聞書』の解説では、宗箇は町衆の利休と武家の織部の両方の考えを取り入れた中間型の人物であり、それが「美しい」という表現に繋がったことであろうと締めくくった。



竹内氏の講演

竹内氏は、茶会記の中から慶長四年二月の『松屋会



上田氏の講演

上田氏は、慶長四年の春屋宗園の『一黙稿』をとり上げて、古田織部と上田宗箇の「道号」についての解説から話を始め、続けて資料の『茶道長問答抄』

から織部の特徴として、床の窓（墨蹟窓）に花入を設えた織部の創意が、宗箇にも受け継がれていることを指摘した。特に織部らしい考え方として、「古き祖師の墨蹟ハ紙うちあたらしき」、「ちかき祖師は紙のうち古き」という記述をもとに織部の美意識について詳細な研究解説が行われた。

更に『宗箇様御聞書』では、数寄屋と鎖の間の使い方や、数寄屋御成の茶についてまで幅広く言及した。また道具の取り合わせに関して流儀色が出はじめており、利休・織部風の道具の中でも特に「美しい」ものに着目してそれらを用いている、などと宗箇の独特な茶の世界の解説が行われた。



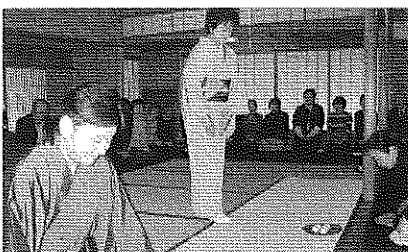
長屋門付近にて



和風堂の露地にて

三十一日の上田流和風堂の見学会は、午前九時と十一時の二回に分けて行われた。見学

者は履物を履き替えて、長屋門脇から外露地・内露地へと進み、露地の風情をゆっくり楽しんだ。今回特別に四畳台目の「遠鐘」の囀口より一人ずつ席入り、「鎖の間」から広間の「敬慎齋」へと進み、ここで一同お抹茶を一服頂いた。

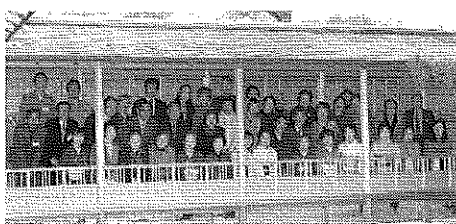


和風堂にて呈茶

その後、「書院庭園」・「廊橋」を渡り、「上段」・「一之間」・「二之間」・「三之間」、そして三畳中板・八畳などからなる「安閑亭」をそれぞれ案内の説明のもとに一巡し、充実した時間を過ごした。

和風堂は、昭和五十年代より三十年間の歳月を費やして、上田宗箇が広島城内に造営した上田上屋敷を再現したものである。原爆投下の折に、建物・美術工芸品・古文書が無傷

であったからこそ再現が可能であったという。桃山の武將の茶の魅力が随所に感じられる空間構成であった。



廊橋にて

朝から雨が心配された一日であったが、幸いにして露地では雨に降られることも無く予定通りに見学会が進行できて何よりであった。この度の和風堂では、上田宗岡お家元、宗篁若宗匠をはじめ関係者の方々には大変お世話になり厚く御礼を申し上げます。



「茶花」の源流を求めて（その一）

米村孝月

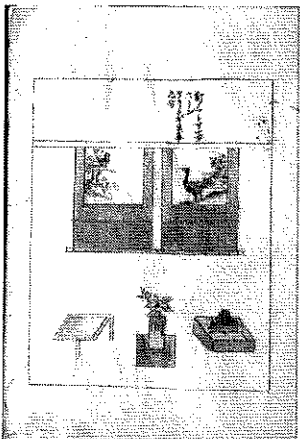
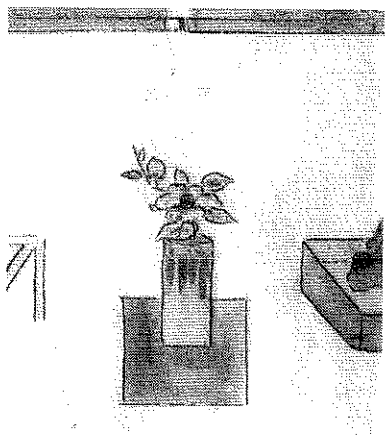
『君台観左右帳記（くんだいかんそうちょうき）』は、唐絵、唐物、器物の鑑賞と、座敷飾りの方式を今に伝えている秘伝書。足利八代將軍義政の同朋衆であった能阿弥が着手し、その子の相阿弥によって大成されました。

墨書された写本が数多く伝えられているようで、中でも『群書類従』が収めている文明八年（一四七六年）能阿弥と奥書されているものと、東北大学図書館蔵で永正八年（一五一一年）に相阿弥が著した、この二書が代表とされています。

『君台観左右帳記』が伝えている抛入花（なげいれはな）の絵図は、「茶の道」「花の道」の生け花を生む源泉とされてきました。事実、茶の湯の秘伝書や、後の世に興る生け花の流派の多くが、同書が伝えている「三具足（みぐそく）の花」を、その興りとして伝えています。一例をあげれば、正徳三年（一七一三年）に刊行された『古今・茶之湯諸抄大成』、文政九年（一八二六年）に貞松斎、米一馬が著した『遠州流 挿花切紙口伝書』がそれに当たります。

私蔵の『君台観左右帳記』には「文明八年・能阿弥」の奥書が有ることから、『群書類従』が収めている異本であることが分かるとも

に、彩色された「座敷飾りの次第」を併せて伝えていました。ここには「座敷飾りの次第」から、床の間に抛入花を生けた絵図を載せておきます。



絵図は、床の間に二幅対の掛け軸を掛け、その掛け軸の前に椿の花が抛入れて有ります。その抛入れ花をよく観ると、そこには「茶花」の源泉を彷彿とさせる姿がありました。

將軍義政は、東山の別荘で晩年を暮らしました。その生活の中で、最も大切なのは「座敷飾の次第」を定めたことだとされてきました。

当時の武士たちは、東軍と西軍に分れて、十一年もの長い間にわたり、次期將軍を誰にするかで争ったのです。その結果、京都御所をはじめ、多くの神社や民家が焼き打ちにあり、京の都は焼け野原となってしまうのです。それだけでなく、長引く戦は人の心を乱してしまい、世は下克上へと向かって行くのです。その中であって義政は、新しく平和な生活を打ち立てるにはどのようにすればよいかと日々思いを巡らし、次のような結論を得るのです。特別なことをするのではなく、規則正しい日常生活をすること。

その答えを本に義政は書物を書き著すよう能阿弥に命じました。そうして著された一巻の書物が『君台観左右帳記』だったので。思い起こせば、將軍義政は応仁・文明の乱の責任者であったにもかかわらず、武士の棟梁としては無力な將軍でした。しかしながら、目を転じて我が国の文化史からみたととき、義政は今日の我が国の文化の基（いしずえ）を築いた人であったことが分かります。言葉を

かえて説明すると、義政は、応仁・文明の乱が終息する以前から、東軍と西軍に二分して戦い続ける周囲の武士たちを遠ざけ、静かな反省の日々を送ったのです。その反省の日々を通して、「平和な世を作る本(もと)」は、日常生活にある」ことに気付いたのです。この事が『君台観左右帳記』と題する書物を生むのです。

『君台観左右帳記』が伝えている座敷飾りの内容は、義政が御成(おな)りするとき、つまり將軍義政が臣下の邸宅を訪問するとき、このように床飾りをしてお迎えしなさいと書き示した「お触れ書き」だったのです。のちに相阿弥は『御飾記』を著しますが、『君台観左右帳記』では秘伝とされた記述や小川御所での義政の暮らしぶりを書き加えています。

『御飾記(おかぎりき)』は、徳川四代將軍家綱の時代の万治三年(一六六〇年)に、木版刷りの本として出版されます。すると、それまでは武家の間の仕来りとされてきた床飾りが、我が国の庶民たちへと広まって行くとともに、ここに我が国の固有の床の間の文化として定着して行くのです。同書には、次のような秘文が記されています。

昼の御座所の丑寅(うしとら)に四帖敷の御間有。東向きに一間の御書院有。つねのいびつなりの花瓶、ただ一つををかるゝ。

「読み下し文」

文明六年(一四七四年)、義尚が九代將軍に就任すると、義政は、新に造営された小川御所へ移り住む。小川御所の東北に当たる場所には、畳が敷き詰められた四帖の部屋が有る。義政は、その部屋で昼間を暮らした。

部屋の東側には、幅が一間(約一・八畳)の床の間が設けられていた。その床の間には、常に、いびつな姿をした花瓶が一つ置かれていて、野の花が生け添えられていた。いびつな姿をした花瓶とは、我が国で焼かれた花瓶のこと。多くは信楽焼や備前焼を指しました。そのような花瓶は、中国から舶載した青磁の花瓶とは比べものならぬほど粗末なものでした。つまり、青磁の花瓶が玉(ぎょく)や翡翠(ひすい)に似た肌触りと色彩を持ち、姿形も完成度の高い物であったのに対して、我が国で焼かれた信楽焼や備前焼の花瓶は粘度に小石を含むため、花瓶の表面が凸凹しているだけでなく、はじけている物もありました。しかも技術の未熟さから胴回りは

少し歪み、口元から釉(ゆ)が垂れ落ちていました。そのような花瓶を、義政は好んで床の間に居(す)え、野の花を生けて観賞したのです。

絵図は、そうしたいびつな花瓶に生けられた抛入花の姿がどのようなものであったのかを今に伝えてくれます。そこには親しく他人に呼びかける心持ちで生けられた抛入花の姿が描き留められているだけでなく、心安らぐものがありました。(次号に続く)

### 例 会

東京例会

(平成二十一年五月三十日)

「向付展によせて」

砂澤祐子

向付は懷石料理に用いられ、刺身や膾・鱈という生魚などの和え物を盛る陶磁器である。この名称は懷石膳の向こう側の位置に置くことから付いたという。

展覧会を開催するきっかけとなったのが、茶碗と向付との関係であった。かつて茶の湯の名称を集めた展覧会を開催した際に調べた結果、黄瀬戸茶碗のほとんどが、向付からの

転用品であったという事実である。五島美術館所蔵の黄瀬戸茶碗「柳かげ」の内箱蓋裏には、小堀遠州の第四子小堀十左衛門による墨書があり、黄瀬戸向付を茶碗に転用したのが、遠州が活躍した江戸時代前期であることが明らかであり、このころの規範に変化があらわれたことが推察される。こうしたことから「向付」という器に興味を持った。

向付という名称がいつから出現したかなどの疑問もあった。桃山時代より千家の道具を制作してきた樂家では「膾皿」という名称を歴代踏襲し、「向付」の名称を使うのは十九世紀以降である。

『槐記』の享保九年十月十六日の条には、「先 黄瀬戸ノ猪口」とあり、蓋が付き、温めた膾が盛られていた。器ごと温めることを想定するならば、高温で変色する漆器よりも黄瀬戸などの陶器が適していたと考えられる。

こうした特殊な用途から用いはじめた陶器の器は、色彩や自由な形などから、新奇なものを好む茶人たちの間で、しだいにものではやされるようになったと考えられる。

もとは揃物の向付であった胴部に胴紐と呼ぶ凸線がめぐる半筒形の黄瀬戸茶碗がある。京都の遺跡から発掘された一六三〇年代に廃

棄した漆器には胴紐があった。浅い半筒形で外面は腰から口縁に向かって直立する形状の共通性から、胴紐のある黄瀬戸向付の直接のモデルは漆器の平皿ではないかと推定される。今回の展覧会で、「向付」という器が、食卓にのぼった施釉陶器の嚆矢であり、その形・デザイン・産地に見る豊かな多様性は、現在の和洋中の食器を持つ私たちの食卓の器にも繋がっているのである。

「名物製の文様にみる茶人の系譜」

佐藤留実

現存する名物製のなかには、名高い茶人の名称を冠したものが存在する。今回はそのうち「紹鷗緞子」「紹鷗間道」を中心に、類似した文様をとり上げ、そこに何らかの意味合いがなされているのではないかと考えてみた。

はじめに江戸時代に出版された版本等からその特徴を追ってみた。まず「紹鷗緞子」については、『万寶全書』(元禄七年)に「名物ノ切」として名称が確認できる。文様についての具体的な記述は『雅遊漫録』から記され、概して「紹鷗緞子」の特徴は、花色の地に唐草と龍文があるものという認識が共通していた。

次に「紹鷗間道」については、版本に名称が現れるのは江戸時代中期以降、文様の記載例に至っては『和漢錦繡一覽』(文化元年)以降に登場する。特徴は白地に紺糸で小格子、またはそこに赤糸で金糸を挟み真田があるものとする。

また現在、手鑑や茶入の袋として伝わる「紹鷗緞子」「紹鷗間道」もほぼ前述の文献に記載した文様の特徴と一致している。

一方、これらと類似した文様の名物製に、紹鷗ではない名称が付いているものも存在する。例えば、緞子では紺地に唐草と龍文があるものには「珠光」「宗伍」、間道では白と紺の細かな千鳥格子には「利休」の名称を付けている。

この状況は、紹鷗の名称が意識された名物製の成立年代、先述の文献を参考にすれば江戸時代以降、紹鷗の存在を茶人の系譜に位置付けようとしたものではないだろうか。共通する類似文様に冠された名称を考えた場合、唐草・龍文にみえる珠光緞子、宗伍緞子、紹鷗緞子は、村田珠光↓十四屋宗伍↓武野紹鷗といった茶人の系譜が緞子の名称に反映され、さらに間道においては、細かな千鳥格子文に紹鷗間道、利休間道の名称が付けられており、

武野紹鷗↓千利休へと続く子弟関係が表されていると考えた。紹鷗をはじめ憧憬の茶人たちの名を伝える名物裂の文様には、時代が紡いだ茶人の系譜が織り込まれているのではないだろうか。

(平成二十一年十一月二十八日)

### 「喫茶文化とオリエンタリズム」

田中秀隆

続く谷村玲子氏の発表に備えて、カリフォルニア大学ロサンゼルス校が、日本女性に「聖と俗」という題で女性と茶の湯につて寄稿を求めてきた背景を補足した。

十九世紀のフランスでは、中近東に取材した異国趣味の絵画が、オリエンタリズムと呼ばれていた。オリエントの女性であれば、同時代の女性をモデルとしてでは許されなかった裸体表現を可能にした構造は、『蝶々夫人』、『お菊さん』と日本女性を対象とした作品にも見られる。オペラの蝶々夫人が初演された時代は、『茶の本』が出版された時代に重なっている。二十世紀に向けての、万国博覧会での日本イメージの発信に関与していたのが岡倉天心である。当時の万国博覧会は、新しい科学技術上の発明の顕彰・促進という光の側

面と、列強が獲得した植民地を未開として展示し、自らを文明として位置づける側の側面を持つていた。日露戦争に勝利した日本人が自らを文明と位置づけつつも、列強からは、人種的には未開とみなされる構造を熟知していたのだ天心の『茶の本』は、新渡戸稲造『武士道』、内村鑑三『代表的日本人』とくらべて、西洋のヒューマニズムへの懐疑を含んだ点がユニークなものとなっている。一方、茶道を審美主義の宗教とした定義に沿う形で、道家思想の淵源、茶室という礼拝空間、利休という殉教者を描いた『茶の本』は、茶道における遊興的な要素、女性的な要素を排除する理解の枠組を提供した可能性も否定できない。

### 「女性の茶の湯―江戸時代を中心に―」

谷村玲子

本発表は、十一月中旬にカリフォルニア大学より出版された、同大学フオウラー美術館(Fowler Museum at UCLA) 編集論文集、*Sleeped in History: The Art of Tea* の内、谷村が担当した第四章 *The Sacred and the Profane: The Role of Women in Edo Period Tea Culture* を基としたものである。

古田織部と上田宗箇は十九才織部が年長です。共々千利休に学ぶ利休亡き後、上田宗箇は古田織部が大坂夏の陣後自刃するまで二十数年に亘り織部に茶の湯を学びます。織部に二十数年の長きに亘り学びながら造形においては異なります。

近年紹介された古田織部より島津義弘宛の手紙の中に宗箇が織部の名代として島津義弘邸を訪れ薩摩焼の指導をしています。宗箇の良いという品はよくないと織部が述べています。自分の名代にする程身近で信頼しているが、美意識については互いに譲らない。宗箇も師織部の好みであるからという理由だけで尊重することはしていない。あくまで己の美意識の指し示すところを好みとします。それは既成の権威を認めず己を貫く戦国時代の人間像に共通するものであり魅力を感じます。

徳川二代將軍秀忠は古田織部に茶の湯を学びました。慶長十年以降秀忠の御成の次第に数寄屋での茶事が加わりました。織部が深く関わったと言われています。元和に入り既に織部は亡くなっていますが数寄屋御成が成立します。

上田宗箇の広島城内上屋敷は正に数寄屋御成が叶う最も早い段階での構成と言われている。

三十年の歳月を費やし昨年百三十七年振りに現在地に広島城内上屋敷の構成再現を行いましたのでそのことをお話し致します。

(平成二十一年九月二十五日)

### 鎌倉時代の茶

福島金治

鎌倉時代の喫茶の様相を近年の研究成果を確認しつつ検討した。茶は平安後期には修法のなかにみえ、神仏へささげるものとしてあった。鎌倉期になると日興化儀三十七箇条に「茶湯ハ唐土ノ礼也」とみえるように、中国風の文化の一つと認識された。「茶境」が中国陶磁の修飾語として使用されるのも、そのことを物語っている。喫茶の習俗は広がり、茶は贈答の重要な品物となった。伝法灌頂の阿闍梨の布施にも使われ、金沢氏と称名寺を例にとれば、檀那は抹茶の調製や茶道具の調達等を寺に依存した。茶は梅尾茶などがブランド化し、数種の茶を楽しむ場があらわれて闘茶が発生した。一方、將軍家御所では茶とともに白土器が関西から調達されたが、興福寺法華会の道具類をみると、白土器は菜を盛る器として使用され茶・酒が振る舞われた。鎌倉での喫茶にも同様の傾向があったろう。

執筆依頼の段階で、編集者側が「聖と俗女性の茶湯」という枠組(題)を強く主張したことから、筆者は江戸期に時期を絞り、宮中・公家女性、千家の女性(宗見)、鳴原の揚屋、そして女性向け啓蒙書から、町人・武家のそれぞれの女性の茶湯を論じた。論文では、キリスト教精神に基づく「聖と俗」という、西洋的な文化概念を裏切るような、日本文化の多様性を明らかにし、さらに江戸期の日本女性の教養、向上心、そして強さといったものを、女性の茶湯を通じて、紹介することができたかと思う。

発表では、この論文執筆の目的を明らかにすることで、比較文化的な視点も加え、順次内容を説明し、特に論文の時以上に啓蒙書を詳しく論じた。論文完成後も新しい発見があり、発表では、江戸期の啓蒙書に見る女性の茶湯の変遷にふれると共に、これからの研究の方向性も示唆できたのではないかと、考えている。

### 東海例会

(平成二十一年六月二十六日)

### 「武家茶道―織部と宗箇の造形―」

上田 宗箇

最後に茶の生産をみよう。建久二(一一九二)年の良峯師高所領謄状写には肥後国求麻郡永吉庄内の公事に板・漆などとともに茶が見える。茶は鎌倉初期の南九州ですすでに公事化していた。中期には、畿内近国・関東でも茶園がみられるようになり、「伊賀国茶」などと特産茶があらわれた。闘茶成立には産地の成熟という事情が伏在している。

(平成二十一年十一月二十七日)

### 「天目の由来―中峰明本関係説と幻住庵清規―」

岩田澄子

「天目」に関する考察は、浙江省・西天目山竈跡での天目碗焼成報告(姚桂芳「論天目竈」一九九七)により、根本的な見直しを求められている。

円覚寺塔頭の『仏日庵公物目録』(一三二〇)では、「天目」は飲器名ではなく、中峰明本を指していた(天目贗、天目真跡)。天目(盞)の初出年と禅僧の留學状況から、「天目」の名称は単に山の名前ではなく、天目山を拠点として元代随一の活躍をした禅僧・中峰明本が関係すると提唱する(佐藤豊三/岩田説)。中峰は皇帝より普忠国師の号を賜るが、終世、名刹の住持を拒否して山林江湖を

渡り歩き、所々で世俗を離れた草庵を結び、  
幻住庵と称した。

中峰明本撰『幻住庵清規』（一三二七）に  
は、飲器名として「盞」だけでなく「盃、甌」  
もある。これらの異同は不祥だが、興味深い  
記述と思われる。

日本における中峰の影響力をみると、近年、  
『幻住庵清規』附録にある「開甘露門」が、  
日本の禅宗（臨済・曹洞・黄檗）でお盆の時  
に使われる重要な經典の祖形である可能性が  
指摘されている（野口善敏『開甘露門の世界』  
二〇〇八）。また、松尾芭蕉は晩年に「幻住  
庵記」（『猿蓑』所収）を残しており、芭蕉  
は中峰の生き方を意識していたと思われる（西  
田耕二『芭蕉』幻住庵記」と中峰」一九九九）。

さらに、日本に黄檗宗を伝えた隠元隆琦  
は、煎茶道の開祖とされるが、黄檗宗は中  
峰の弟子・千庵元長の法系で、中峰は黄檗宗  
の遠祖と考えられている。

### 近畿例会

（平成二十一年十月三日）

「『南方録』『覚書』にある「仏祖の行いの  
あとを学ぶ」とは」

杉谷朱美

斎は、アヘン戦争を分析し、「茶は国を豊か  
にする交易品」と確信していた。

茶の湯は、江戸店勤務になった二十一歳の  
時から平井宗三（裏千家）を師として学び始  
め、三十歳の時に浪速で『南都松屋茶会記』  
を入手していた。竹斎は国学者でもあり、茶  
室「吉葛園（よさづらのその）」は『日本書  
紀』由来の名前で、瓢箪の意味であると思わ  
れる。

茶葉の栽培は、江戸店の客だった経世家の  
佐藤信淵から薫陶を受け、地元射和（いざ  
わ、現三重県松阪市）で農民に栽培を推奨し  
た。さらに、地元製茶工場を建設し、横浜  
で活躍する実弟・竹口信義と共同で茶葉の輸  
出を手がけたのは文久元年（横浜開港の二年  
後、桜田門外の変の翌年）である。しかし、  
開国論者として名指しで命を狙われ、幕府の  
攘夷決定が打撃となって、輸出事業は開始か  
ら二年あまりで頓挫した。竹斎は鳥羽藩主に  
呼び出され、「交易品を出した者はさらし首」  
と言われる事態を体験していた。

また、安政三年に射和万古（いざわばんこ）  
を開窯し、茶道具や茶壺が作られた。万古焼  
（古万古）の創始者・沼波弄山（ぬなみろう  
さん）は竹斎の縁戚にあたり、再興万古とし

水を運んだり、薪をとったり、湯をわかし

たり、茶の湯の営みは、きわめて日常生活そ  
のものである。それ故か稽古において点前の  
手順を覚えるとすっかり日常の喫茶の延長に  
なって終わってしまう。わび茶において茶の  
湯のいとなみとは何かについて、改めて考え  
てみようというのがこの論の始まりである。

『南方録』『覚書』にある、「水を運び、  
薪を取り、・・・みなみな仏祖の行ひのあと  
を学ぶ也」、この「仏祖の行ひのあとを学ぶ」  
とは何か、まず「仏祖の行い」とは何かにつ  
いて考えたい。『南方録』に「禅林の清規を  
本とし」とあることから、今回は清規とはど  
ういうものか焦点をおく。

清規を最初に形にしたものは、百丈懐海に  
よる「百丈清規」である。「百丈清規」の成  
立は禅宗の確立ともいわれ、その後の禅院清  
規の基となっている。百丈禅師はまず「行普  
請法、上下均等也」と、釈迦が禁じた生産労  
働をも行として、それも上下関係なくすべて  
の者が行うべきこととして規定している。そ  
れは生産労働、搬柴運水の作務も、真理に承  
当する最も貴重な場面として、労働の価値の  
質的転換が図られたことが大きな意味を持つ。

百丈禅師の師、馬祖道一にあって、「もし

て各地の名だたる陶工が集められた。だが、  
高級品は売れず、輸出事業の失脚とともにわ  
ずか七年で閉窯となった。

慶應二年に小栗上野介の招聘で江戸滞在中、  
竹斎は旧知の幕臣・大久保一翁に依頼され、  
茶や桑の栽培書『蚕茶楮書』を著した（一翁  
が慶應三年に出版）。静岡の茶栽培が本格化  
するのは維新後で、一翁は牧ノ原台地の開拓  
を推進した主要人物である。竹斎が静岡茶に  
及ぼした影響については、今後の検討課題で  
ある。

また、竹斎が極秘裏に桜田門外の変に関す  
る膨大な記録を残していたことが近年発覚し  
たが、その記録を隠した場所も、茶書（『川  
船の記』全八冊）の中であった。

二〇〇九年は竹斎生誕二百年にあたる。時  
代の最先端を行く竹斎の茶事業は、幕末の政  
情不安の中では時期尚早にすぎたのか、不運  
にも失敗に終わった。しかし、真摯に日本の  
将来を考えた結果として、茶を主軸とした勇  
気ある偉業が展開された事実を、広く再確認  
する時期がきていると思われる。

直にその道を会せんと欲せば、平常心是道な

り。何をか平常心と謂う。只只今の行住坐臥、  
応機接物悉くこれ道なり。」と、労働作務は  
かりでなく、生活そのものが行であることが  
すでに説かれていた。ここで禅院としての修  
行僧の生活は、食事、入浴、洗顔、廁の使い  
方にいたるまで、一挙手一投足の細部にわた  
る威儀作法が規定された。インドから中国に  
入った仏教が、戒律を守るべき律院から独立  
し、自分自身の受戒による主体的に行ずるべ  
き清規を基にした禅院が確立したのである。

百丈禅師は仏殿を造らず、釈迦の「法をよ  
りどころにせよ」という教えに沿い、活仏と  
しての住持を中心に、禅院の共住生活、在家  
との和を保ち、各修行僧の己事究明の可能な  
場として求めたのが清規であった。

（平成二十一年十二月十九日）

「茶文化のデパート・竹川竹斎」

岩田澄子

伊勢の豪商・竹川竹斎（たけがわ・ちくさ  
い）は、玄々斎（裏千家流家元十一世）と親  
交が深いことで知られているが、茶に関する  
様々な分野で最先端の活躍をしていた。黒船  
が来航した直後に『海防護国論』を著した竹

東京例会（会場：五島美術館講堂 午後二時

）

四月二十四日（土）

「『茶経』に記された甌の器形について」

水上和則氏

「永青文庫の名物裂」

佐藤留実氏

五月二十二日（土）

「備前焼の香合について」

下村奈穂子氏

「未定」

中村修也氏

六月二十六日（土）

「芦屋釜の考察とその鑄造技術」

新郷英弘氏

「茶道名言の構造―歴史と思想・文学を

めぐって」

田中秀隆氏

九月二十五日（土）

「未定」

高橋忠彦氏

「千宗旦の茶の諸相」

中村静子氏

浜松例会（会場：ホテルコンコルド浜松

午後一時三十分）

五月三十日（日）

「茶の湯の竹芸く籠花入を中心として」

池田瓢阿氏

東海例会（会場：名古屋文化短期大学

アセンブリ・ホール 午後六時）

四月二十三日（金）

### 例会の案内

「茶杓から見る鈍翁とその時代」

池田瓢阿氏

「大名家の茶道役」

岡 宏憲氏

近畿例会（会場：池坊短期大学第一会議室  
午後二時～）

七月十日（土）

「珠光の「和漢」について」

萩原英子氏

「茶の湯と能楽」の基礎的研究

―茶会記に登場する能役者たち―

岡本文音氏

北陸例会（会場 未定 午後二時～）

七月三日（土）

「未定」

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室  
午前十時～十二時）

六月二十七日（日）

「茶の湯文化学会二十二年大会の研究  
発表をテーマとしたシンポジウム」

永吉溪滋・柏井 武氏

このほか十二時～四時まで「お茶事」  
を予定しています。席主未定、お茶事を  
ご希望の方は予めご連絡下さい。

（参加費五千円）

### 平成二十二年大会

日時 平成二十二年六月十九日（土）

二十日（日）

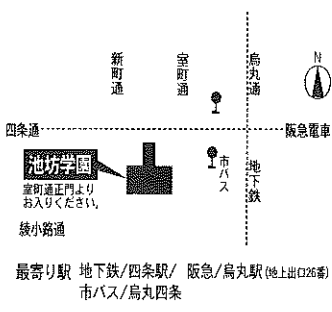
会場 名古屋文化短期大学

### 会誌の論文募集

当会では会誌『茶の湯文化』に掲載する  
論文を募集しております。

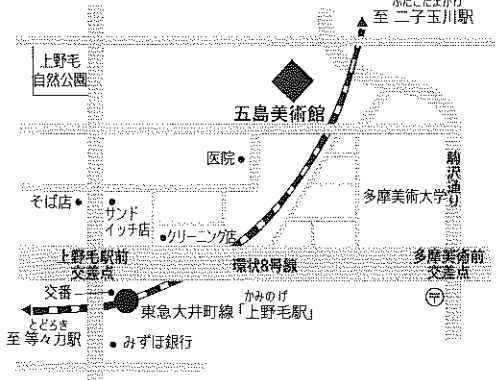
投稿を希望される方は、当会事務局まで  
ご連絡下さい。ふるっての応募をお待ちして  
おります。

### 近畿例会々場（池坊短期大学）



池坊短期大学・池坊文化学院  
〒660-8491 京都市下京区四条室町鶴鉦町 ☎0120-87-3852

### 東京例会々場（五島美術館）



〒158-8510 東京都世田谷区上野毛3-9-25  
ハローダイヤル 03-5777-8600 / テープ案内 03-3703-0661

### 東海例会々場（名古屋文化短期大学）



アセンブリ・ホール（A館3階）  
※明るいレンガ色の建物です。  
〒461-0004 名古屋市中区葵1丁目17-8 TEL052-931-7112